

年末年始の伝統行事



木太刀こたちの舞で豊作祈願

御厨町寺ノ尾上地区にある八幡神社（森川典幸宮司）で12月15日、木太刀の舞が奉納されました。

これは、同神社の例大祭のときに奉納される神楽の1つ。木製の太刀を担いで舞う神楽で、江戸時代からの伝統行事です。太刀が大きいほど翌年は豊作になるとの言い伝えがあります。

氏子の田中祐毅まさきさん（38）が朝から約3時間かけて作った太刀は、イタビの木で作られ、長さ約1.2メートル、重さ約25キログラム。今福神社の早田伸次しんじ禰宜が太刀を担ぎ、笛と太鼓に合わせて舞を奉納し、集まった地区住民約20人が来年の豊作を祈願しました。

大杯で酒を回し飲み

12月24日、志佐町池成地区に300年以上前から伝わる「佐々木祭」が行われました。

池成地区には、平戸藩士でこの地域を治めていた「佐々木様」が、参勤交代で留守中に妻の不義のうわさを耳にし、大酒を飲むようになり亡くなったという故事が残っています。今では「佐々木祭」として、佐々木様に仕えた家臣の子孫にあたる同地区の5世帯が、命日といわれるこの日に持ち回りで毎年開いています。

地区にある佐々木様の墓参りをした後、今年は当番にあたる深江國男くにおさん宅に5世帯から約10人が集まり、直径40センチの大杯で酒を回し飲みし、霊を慰め親ぼくを深めました。



ジャンボ鬼小屋で鬼火たき

1月7日、市内各地で毎年恒例の鬼火たきが行われました。

鬼火たきは、しめ縄や門松に火を放ち、1年間の無病息災や家内安全を祈願するものです。

調川町松山田地区では、久保川志丸しまるさん（59）が昨年11月下旬に、新わら約300束、竹約150本を使い、高さ7メートル、幅5メートルの四角すいのジャンボ鬼小屋を3日かけて制作。1月7日に、地区住民たちが持ち寄った門松などを鬼小屋の中に入れ、久保川さんが火を放つと勢いよく燃え上がりました。





①

もぐら打ちで無病息災を祈願

1月初旬、無病息災などを祈願する「もぐら打ち」が市内各地で行われました。

①星鹿地区では1月6日、小中学生14人が集まり、地区内の約110戸を2班に分かれて回りました。子どもたちは、玄関先で「祝いましょう 祝いましょう 祝いのモチをくれたなら 末も繁盛で世もよかる…」と大きな声で掛け声を掛けながら、新わらで作った「もぐら打ち棒」で玄関の床をたたきました。

②1月14日には御厨長生会（松瀬輝治、吉永和人会長）が地域の伝統を子どもたちに伝えようと御厨保育所、御厨小学校、慈光幼稚園でもぐら打ちを実施。また、1月16



②



②

日には上志佐保育所（辻久敏所長）が、地域、保護者、保育所の交流促進・連携強化や子育て支援などのため、もぐら打ちや餅つきをしたり、地域文化を学ぶ異国間交流としてALTを招いてミニ国際交流をしたりしました。

ももてこう 百手講で豊凶を占う

志佐町庄野地区の王嶋神社で1月8日、百手講が行われました。

的に当たった矢の数で今年の豊凶を占うもので、市の無形民俗文化財に指定されています。

今年の射手は、守山清和さん（28）と松永偉人さん（26）。烏帽子と狩衣姿の2人が約10m離れた場所から直径約50cmの的めがけて約50本の矢を放ちました。地区の住民が見守る中、8本が命中しました。中川明宏宮司は「前半は不調でしたが後半は矢が当たったので豊作が期待できるでしょう」と話していました。



経箱をくぐって無病息災

大般若の経典が入った箱の下をくぐって1年間の無病息災を祈願する「大般若」が1月10日と11日、志佐町の8地区と福島町の5地区で行われました。

江戸時代、この地方に疫病が流行したとき、大般若経を祈とうして回ると疫病が治まったことが始まりとされています。

志佐町里地区では11日に、還暦と厄入りを迎える5人が重さ約10kgの経典の入った箱を交代で担いで、地区内の約200戸を「だいはんにゃー」と掛け声を掛けながら回りました。各家では、担ぎ手にお神酒などを準備して出迎え、経箱の下をくぐり、1年間の無病息災を願いました。